

4509
卷 3

伊勢參宮名所圖會卷之四

目錄



清盛堤
 鷗鶴石
 大間國生社
 中 寫
 厭離山浄寺
 月讀宮
 御贄棚
 國見社
 忌火屋殿
 御調倉
 廣會國見社
 御川祭
 土真寫
 大間廣
 久留山威勝寺
 心法寺
 高川原社
 北御門橋
 徐宜宿鉈
 本柴垣
 御番倉
 御厩
 後波里
 中川原
 草薙社
 下孫古長寺
 日孫三郎社
 三寶寺
 館町
 丸林
 北鳥居
 廳舎
 上御井社
 清盛楠
 豊川
 北御門社
 子良館
 御酒殿
 友園山社
 山田
 離宮院舊跡
 堤 古
 清野井庭社
 川
 小燈
 御小燈

平

早稲田 大学 図書館
35.1.28 覽
藏 書



宮川東岸
豊宮川

風雅集

君代の

三折

官川乃

舟

枝

か

後京極

所名

宮川 山田の入口に是より一名度會川 豊宮川 毎宮川
其原に宮也其非谷より流れて二見大湊なる

小懸野 西に宮川東に川をけり一帯の川はあまなる

清盛堤 宮川の堰を築くは元正天皇靈龜法和貞観の比彦
大風洪水す一記録又是より崇徳院大治三年秋して大宮三座及

大河内神社志登英神社を河水の守護と祀らせ給ふは対平清盛命を
多うて此堰を築く 又弘治三年秋末冬に洪水ありて堰を壊す

御川祭 毎月八月三日是と 法座本記又渡相河原又二忍徳海人より人
奉一魚をとりて非饌又蓄ふとあり今も其末の持守氏の人阿こ
を必く多魚取の式あり 其詞云

新拾遺 沖後と流を宮川の委浪の敷より君瓜代への於る那 朝勝 定家

清盛堤 け付の堰を今も宮とて築くは元正天皇靈龜法和貞観の比彦
大風洪水す一記録又是より崇徳院大治三年秋して大宮三座及

大河内神社志登英神社を河水の守護と祀らせ給ふは対平清盛命を
多うて此堰を築く 又弘治三年秋末冬に洪水ありて堰を壊す

御川祭 毎月八月三日是と 法座本記又渡相河原又二忍徳海人より人
奉一魚をとりて非饌又蓄ふとあり今も其末の持守氏の人阿こ
を必く多魚取の式あり 其詞云

新拾遺 沖後と流を宮川の委浪の敷より君瓜代への於る那 朝勝 定家

清盛堤 宮川の堰を築くは元正天皇靈龜法和貞観の比彦
大風洪水す一記録又是より崇徳院大治三年秋して大宮三座及

大河内神社志登英神社を河水の守護と祀らせ給ふは対平清盛命を
多うて此堰を築く 又弘治三年秋末冬に洪水ありて堰を壊す

御川祭 毎月八月三日是と 法座本記又渡相河原又二忍徳海人より人
奉一魚をとりて非饌又蓄ふとあり今も其末の持守氏の人阿こ
を必く多魚取の式あり 其詞云

新拾遺 沖後と流を宮川の委浪の敷より君瓜代への於る那 朝勝 定家

所名

藤波里

或記云 是を宮川より流地地村の川に流地地に流るるといふ森あり其末の西の方宮川の同
着波家の屋敷あり其末の川に流るるといふ

内宮河原新屋敷の舎合 着波の里といふ

幾子代をねららるるて着波の里乃至もまを經ぬん 龍木田 長真

と流せしは着波家流記にての換ねとまより判者権大納言兼東為共御の判河に里の
あり 兼涼といふ 右勢陽雜記

御牧小野 去源といふ所の小野に流芽生に松系とて流るる

或記曰 此名を流るる者といふ所の一山中に老翁あり一畝中をのびては着波の里の川に
宮川のやうに流るる所を流るる所を御牧小野といふ

岩出里 宮川の上の流るる所を御牧小野といふ

鷲鷲石 宮川の上の流るる所を御牧小野といふ

もあはし西に大板谷野尻河川より流るる東に流るる河川の流るる

所名

藤波里

或記云 是を宮川より流地地村の川に流地地に流るるといふ森あり其末の西の方宮川の同
着波家の屋敷あり其末の川に流るるといふ

内宮河原新屋敷の舎合 着波の里といふ

幾子代をねららるるて着波の里乃至もまを經ぬん 龍木田 長真

と流せしは着波家流記にての換ねとまより判者権大納言兼東為共御の判河に里の
あり 兼涼といふ 右勢陽雜記

御牧小野 去源といふ所の小野に流芽生に松系とて流るる

或記曰 此名を流るる者といふ所の一山中に老翁あり一畝中をのびては着波の里の川に
宮川のやうに流るる所を流るる所を御牧小野といふ

岩出里 宮川の上の流るる所を御牧小野といふ

鷲鷲石 宮川の上の流るる所を御牧小野といふ

もあはし西に大板谷野尻河川より流るる東に流るる河川の流るる



暇な紙
 書し事
 此の教
 毎に指
 を出で
 死作筆
 の

水原佐兵衛
 佐兵衛

神楽
 佐兵衛



諸國の系
 を所師より
 人を起し
 愛く
 通く
 其師
 の名溝
 の名
 組の

中川原

佐兵衛
 佐兵衛

中川原
 佐兵衛

所名

善念此より約野へ三里勢踏石をもちて八里と下りて落雅河に
 して去の一日も善念及び一組一組して往來とれ其旁は二つあり
 急流のれはよく絶景といふは別して約野より上りて
 巖峰中村の南麓見坂とて石の交双の勝景うて松崎に方いと
 又其南に性柄阿藤といふ村邑較多ありて方又往來勢くこの
 市中一魚舟の出るも益疾不絶の中より魚散電又益うてこの
 然あれも田畠之 石ののち後々種はうり其まの三十余年ほど
 の昔も市中に抽みく善念のうて此等石を傳授や、慶くうて葉葉長
 義御のうてうて諸元を以ての觀望入射靈元帝畫師ふか宗仙り
 屏風と團世の其記を女付うりて東涯 隨筆
 〇漢名を鑑音石といひ彼國よりてりそむりて

▲土貢 昔は信より相伝さげ相流の事ありて此の風流に
 〇信より相伝さげ相流の事ありて此の風流に
 〇信より相伝さげ相流の事ありて此の風流に

中川原 官川の源あり人家あり此原小なる向村の内之和名抄より
 書家の源あり此河の西宮川のよ上り田丸の源あり是を中流といふ
 中川原 官川の源あり人家あり此原小なる向村の内之和名抄より
 書家の源あり此河の西宮川のよ上り田丸の源あり是を中流といふ

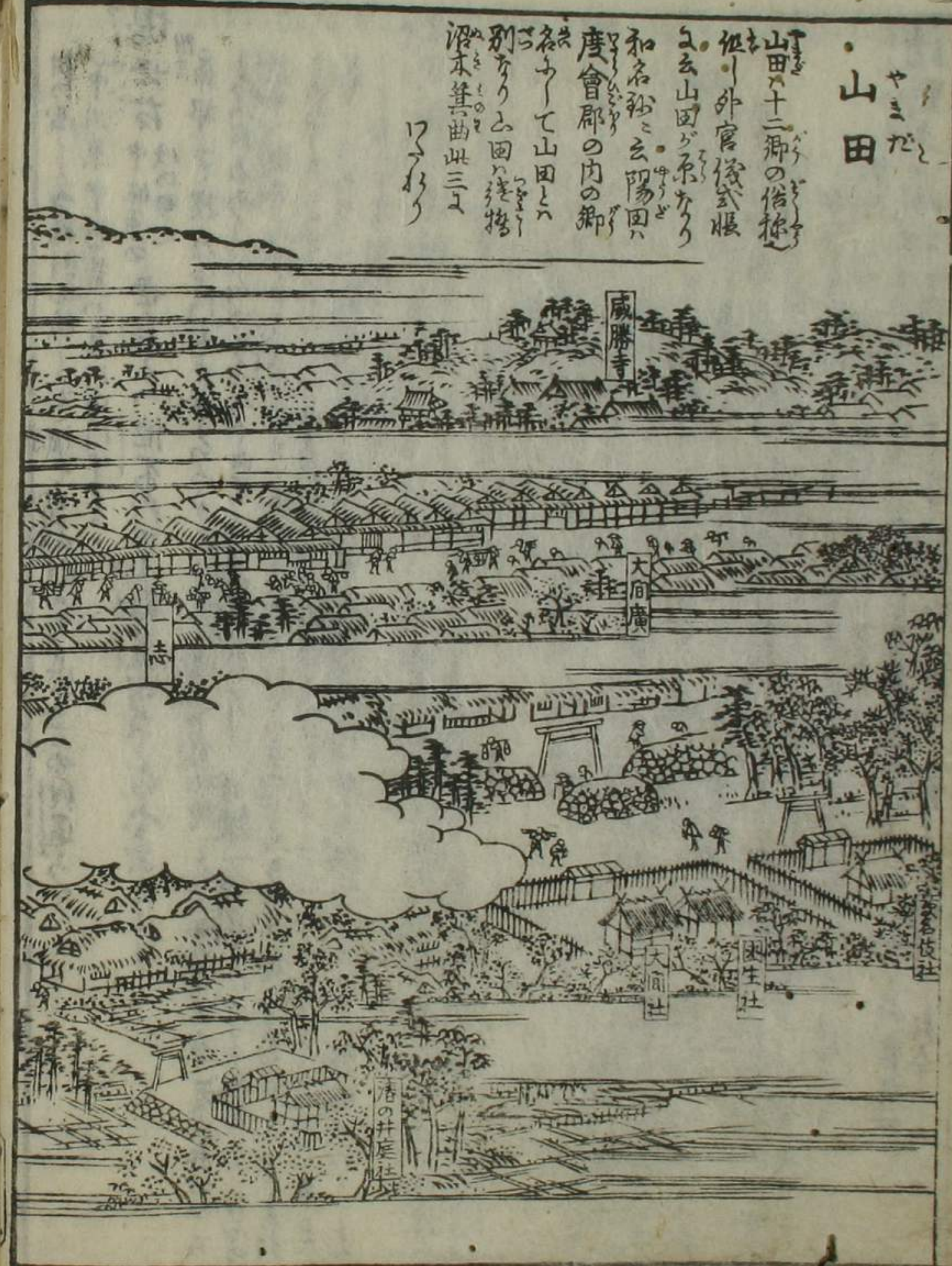
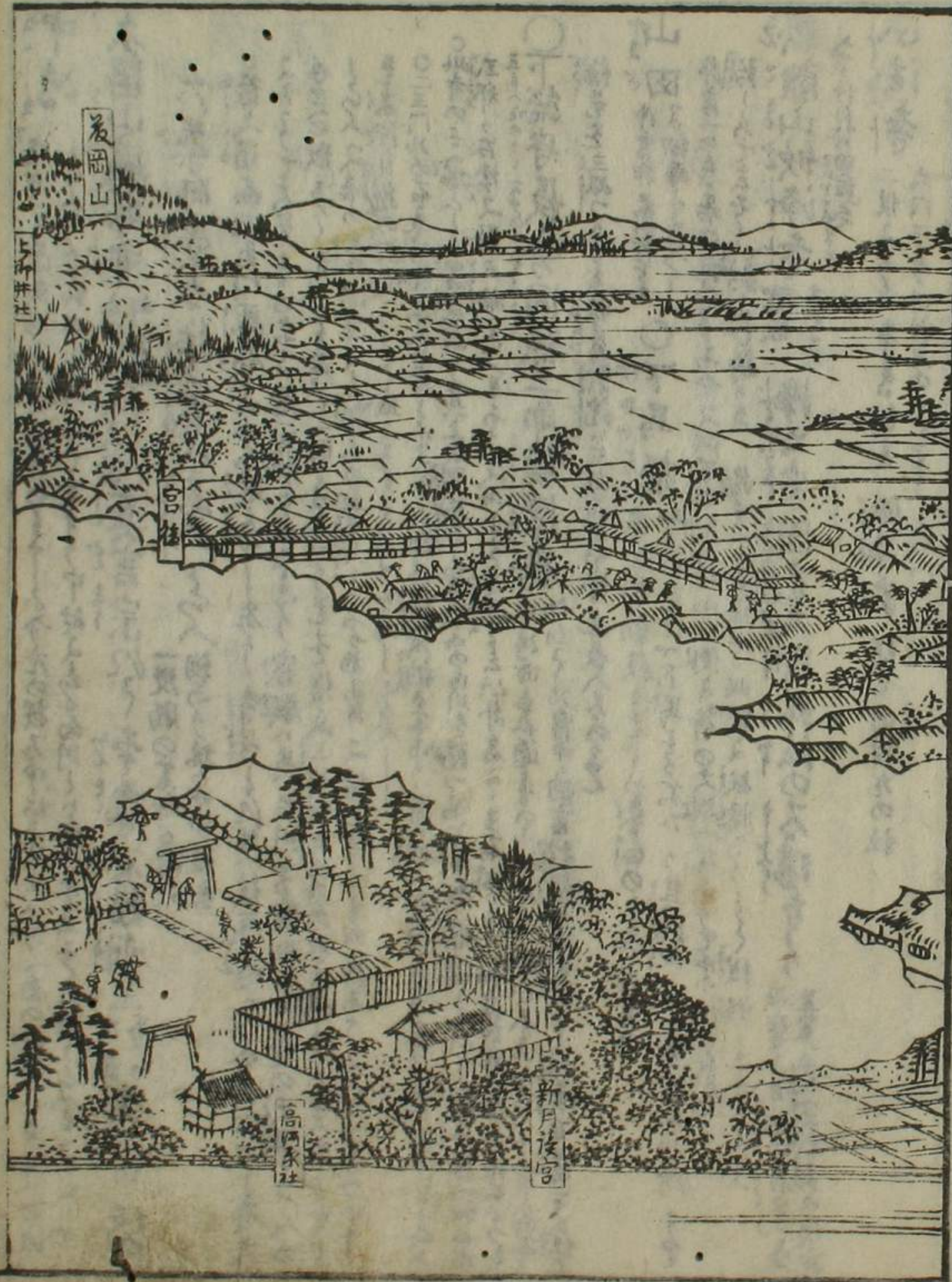
村の源あり磯川の源ありを撰て此の村ありは右の村區なり
 〇中川系中流昔は官川の川中なり

堤 中川系の中流あり他をて小路東所なりとていふ

大間生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社
 〇大間の西の國生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社

草薙社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社
 〇大間の西の國生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社

清野社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社
 〇大間の西の國生神社 大間の西の國生神社 大間の西の國生神社



山田
山田十二郷の俗稱
但し外宮後武帳
と云山田が系を
和名新と云陽回
度會郡の内郷
を以て山田とい
別ありふ回を
源本其曲此三よ
くわく

山田

中流 地きり系町の入田口のまゝ一かたの標中流東へ出ると南の麓に小寺あり

久留山威勝寺 田上の久留山 真言宗 不動明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

一葉師堂 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

昔久留山威勝寺の威勝上人 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

○三門外の石長巻の寺に六十部 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

○下総守長秀同孫三郎頼澄墓 中流西表通寺の内にあり 尊不勳明王 尊不勳明王

山 外宮神奈の町にあり 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

○下馬橋 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

厭離山浄寺 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

正法寺 二侯あり 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

所名

三寶寺 山田の中流寺より十奇西平馬不動明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

離宮院 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

○離宮院に坐中臣氏社四座 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

携幡千々姫今稱するを春日明神なり 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

月讀宮 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

子細内宮月讀の幸に奉と 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

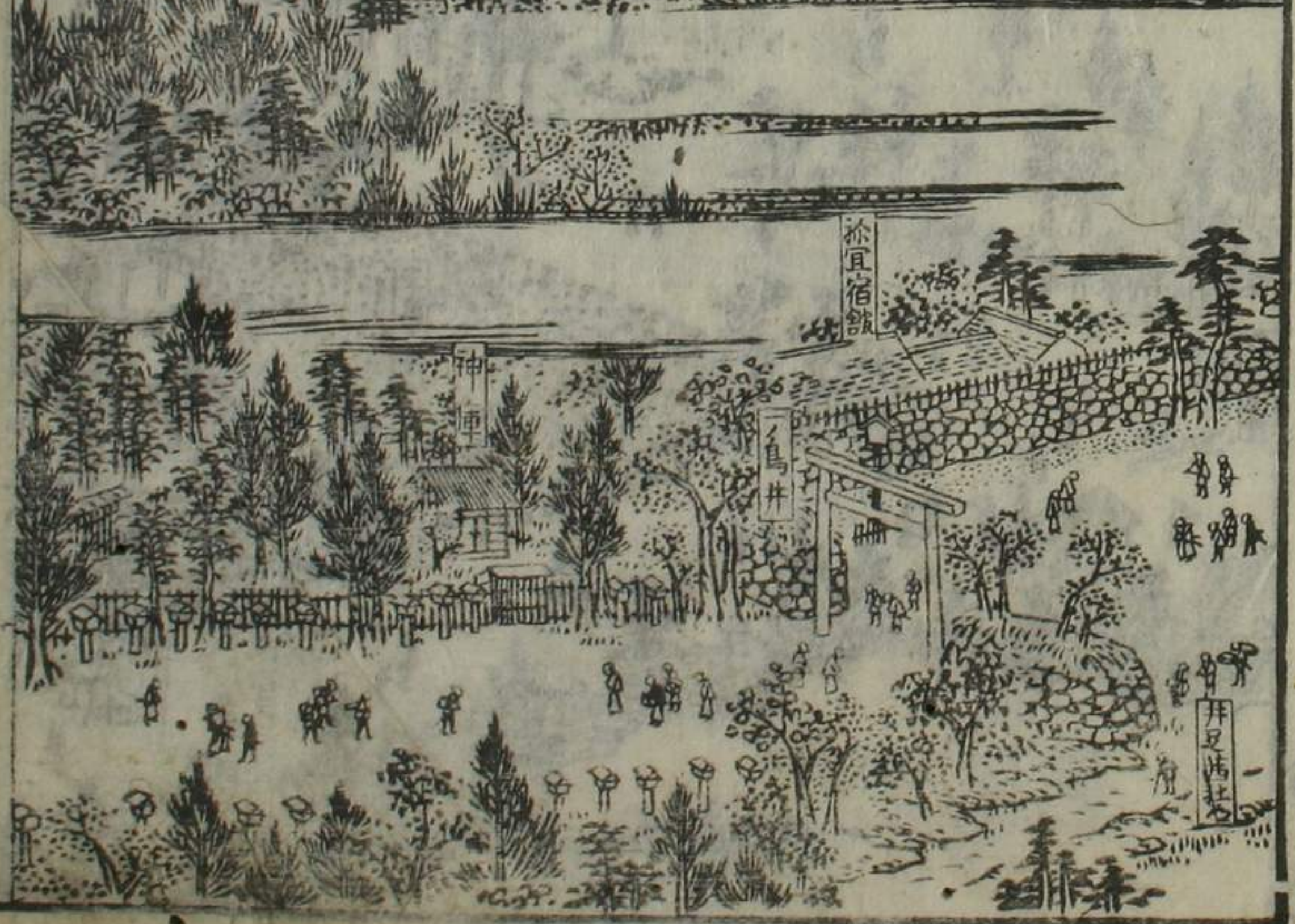
高河原社 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

館所 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

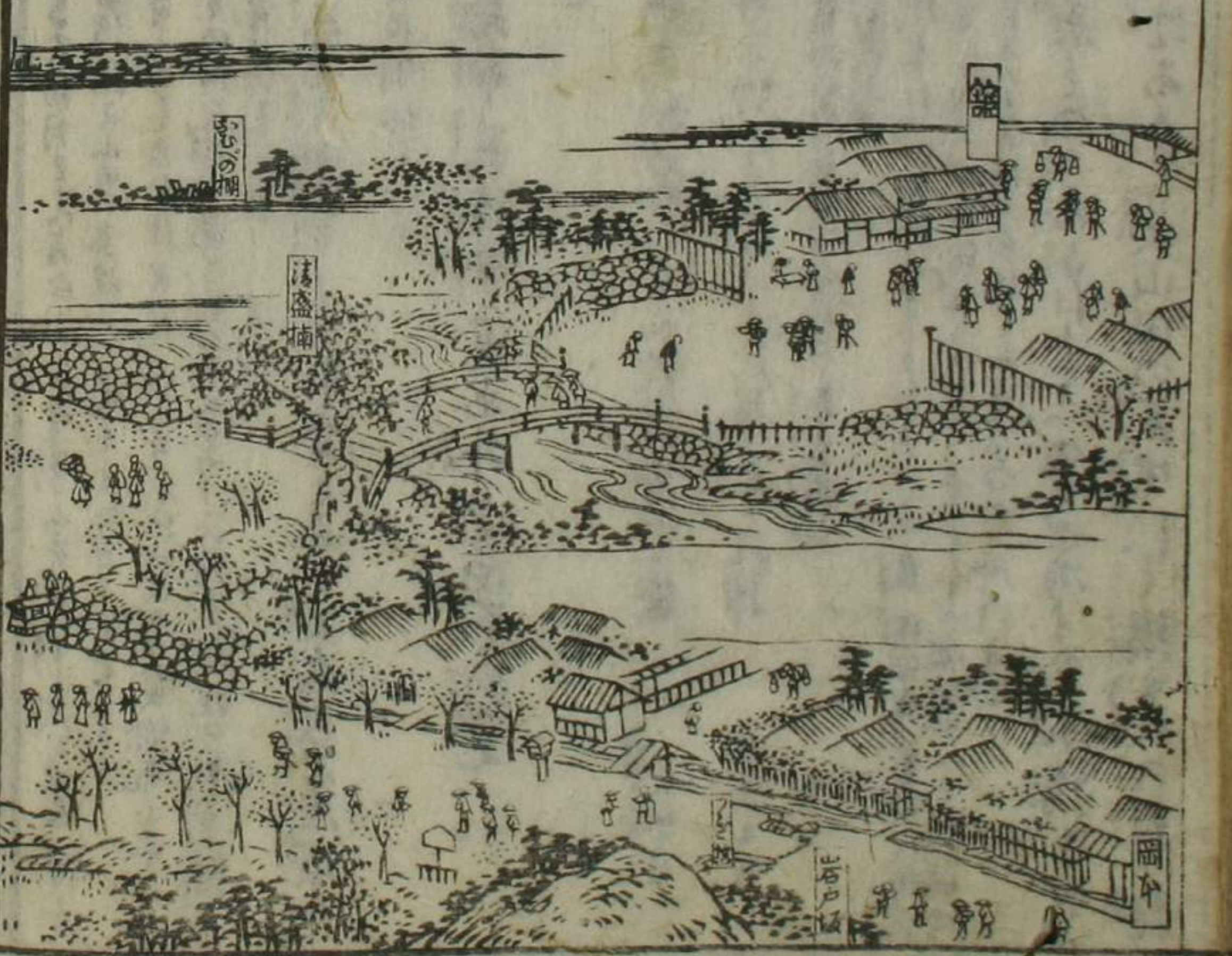
九条宮 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王 尊不勳明王

奉式と館所の内みれのけあして是山田の志中い諸方への経

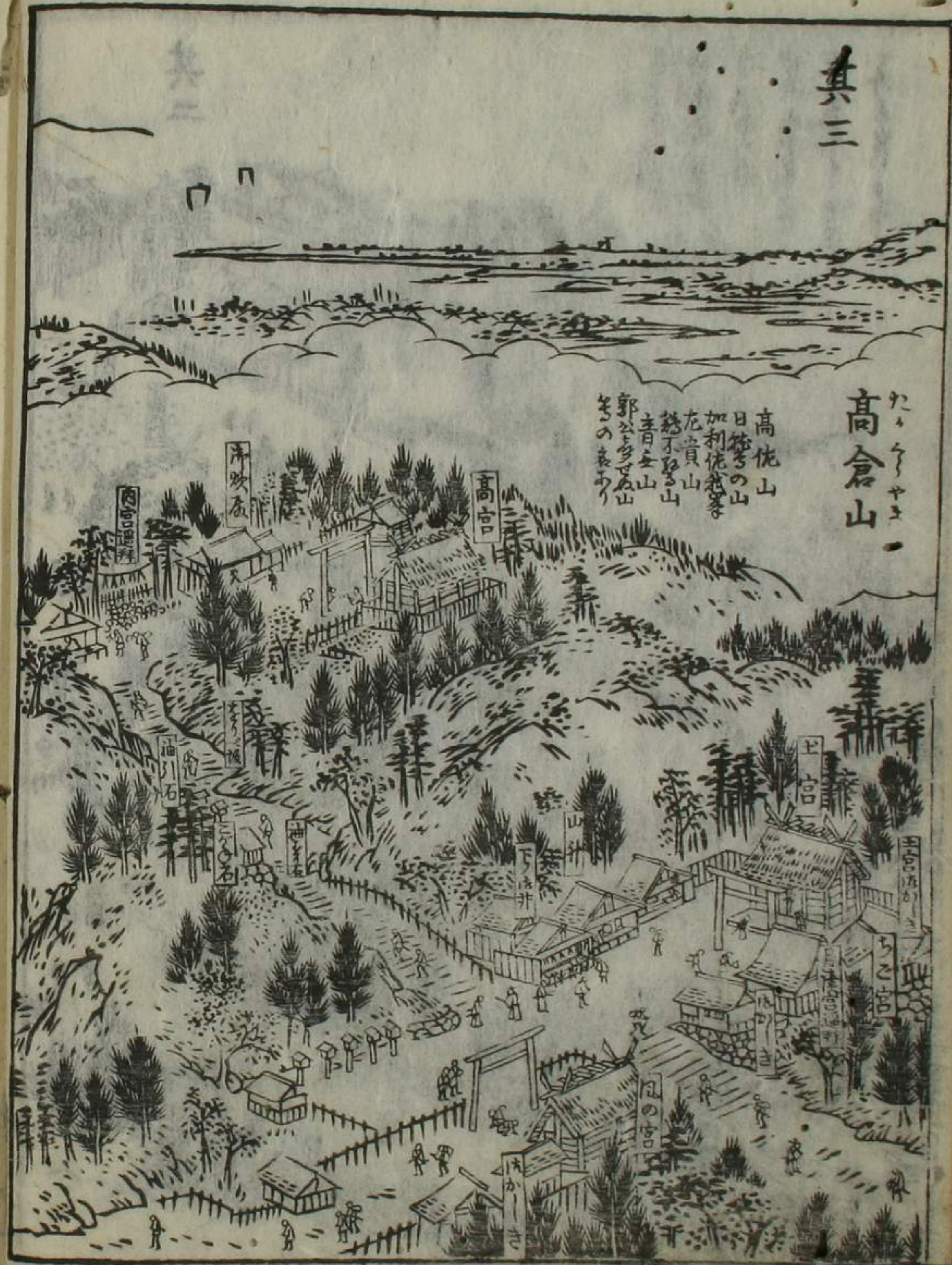
大改大臣 後宇良院



外宮宮中之之圖







去器を君于かり

所名

上河

河原を履か百廿六西此河舟天長舟も天長名舟も恐徳舟もあも

舟もも水の上社ありて其を用水を汲む大社宮の内供に用

るの徳者より其例たが又洗いに忌火屋敷の水と用也聖水を汲む

舟来り日百廿六の間の言ひて高貴の人と違ふも穢穢せざる例あり

泉も昔天村雲命天村雲命の宮祠安祖神祇天長命も後小橋命も天長命も

不滅の水と日向なる徳の峯より丹後の美名舟系は樹は其後此處

園に橋は徳の源ありと云ふ藤原徳の源ありと云ふ

夫木 若う代い濁もあはしきやふりてとあはれ悪徳舟あり

所名

後園山

神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首

後園山 神根百首 後園山 神根百首 後園山 神根百首



手洗場 此處より風の宮傍を以て永正記に御池の古橋の乃とありて云々なり

御池 此處より風の宮傍を以て永正記に御池の古橋の乃とありて云々なり
二尊およりい遠

僧尼拜石 三の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

五百校板 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

三鳥居 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

石壺 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

玉串御門 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

勅使宣旨 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり

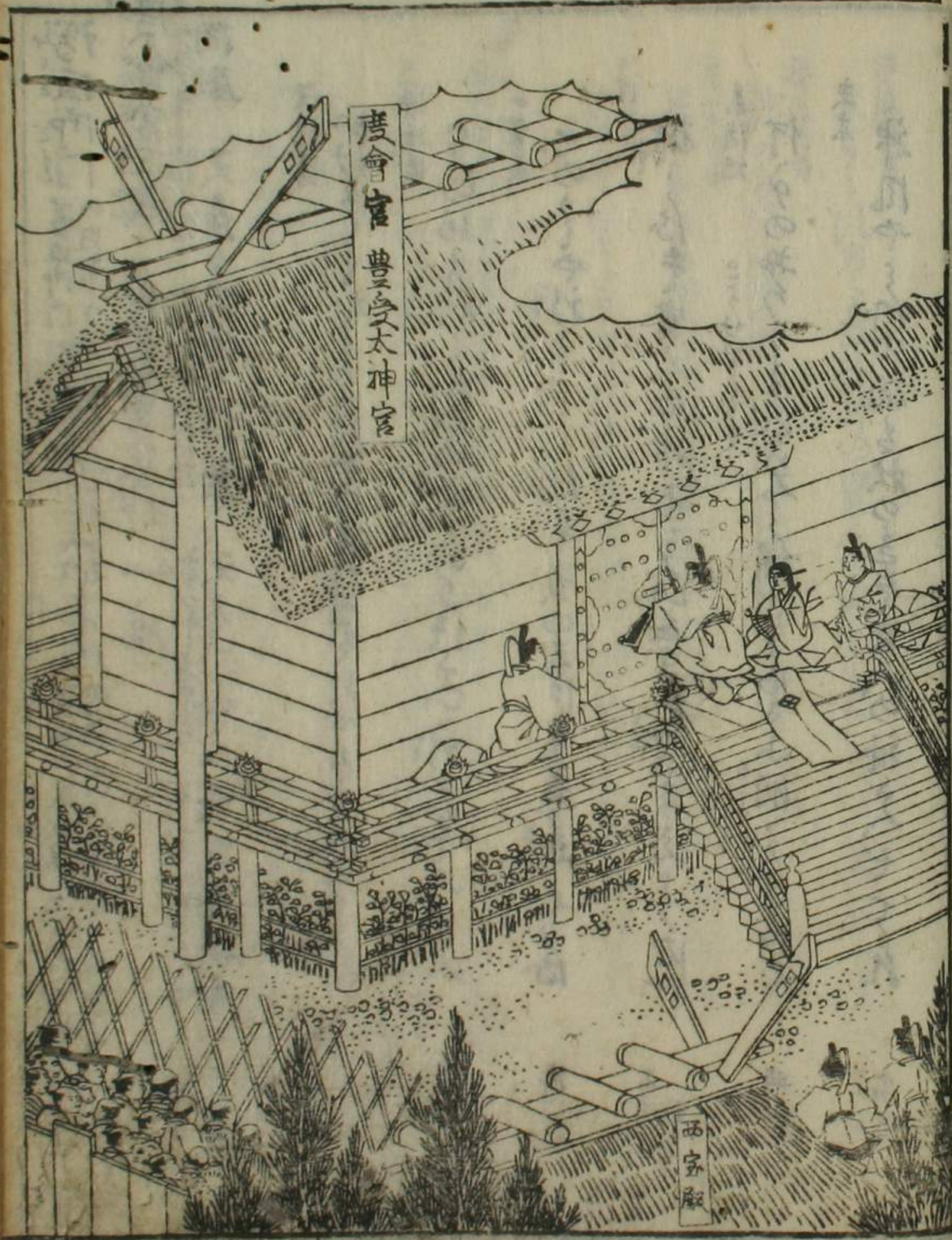
御池 此の石の流あのお橋ありて云々なり
僧尼の指の遊りて云々なり



神嘗祭

引越幣使

天子より西宮勅使
 召て清いさきせ
 め公九月十日十旨
 以て奉命のりまね
 見とれいさきといひ
 り奉養院の清い
 姉とす百葱華と所
 してわくも神祇
 宿(ま)りてかろてか
 こまひつひとて
 養老六年
 九月十一日
 人



唐會宮 豊受太神宮

西守殿



其二

軒後進路のるに宣命とくめして作御伯禁
 庭の事勢退日仍れを後の日よあつて宣命と
 湯と常もなる長月の神霊の所幣を中居
 旅して奉まこと勅となつて進返の園と新踏決
 不との禦宮川と後と種との羽物と楚へのち
 居より下馬仍初あはれ入所馬と引まに玉串
 不れおひて仍ひさしありまより度承のりこと
 をのく飯位よつと中居宣命と續進路の
 宮司又後御所のへらが玉串と
 納り仍り終て所内よ
 ること所幣を納め
 なる所内と出このち
 八段神は食器傍奉り
 仍ひるは委くは近
 在式は倭式帳をい
 ともなる其大扱と記
 をと又此礼の後もふ
 名舞といふあり格
 ひよくの神まつと
 りよ

西守殿

西守殿



幸社順拜

首ハ勢乃及多瓦那
 度會那又を御
 座と揚社未社と
 悉く明報せし
 地かれんも仍注
 日報を田ふの骨と
 つい宮中よ
 其遠拜と
 並き

常ニ信せり小石成りておてい金の青ありこれ山より貞命長官神

庫又納む 續日本紀及難言記を武帝王年廿一年庚寅より始りて至今日迄三則存勢

内宮遷拜所 宮内殿殿此石にして内宮及び別宮を拜しきる者あり

土宮 元りの方より 祭神三座 大土御祖神 宇賀御魂神 右田合神 外宮

第一の別宮又坐と 崇徳院の大治三年庚申の陸守護のあり 宣旨ありて 土宮

殿殿 土宮良の方あり 地護宮 土宮のありて 宣旨ありて 宣旨ありて 小見ありて

月讀宮遷拜所 土宮ありて 遷りてありてあり 月讀宮御殿 日名志

山神社 月讀の宮遷りて 祭神大山祇神と 神祇改訂記よりより 祇と地神乃

の之余もそふなりてありてあり

下津井社 此社の社の傍あり

凡宮 土宮の東の 祭神二座 級長津彦命 級長戸造命 級長と級長は通ひ

外宮兼に別宮 元日の社ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

凡日 凡宮より一七日に凡日社ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

十枝枝 凡宮の東 昔大宮司 十枝とて人推らるる 十枝とて人推らるる 十枝とて人推らるる

對しての名なるべし 四回を巡ると保身中 暴風例されて今平治る 暴風例されて今平治る

高倉山 祭神ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

若代及濁りもあり 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

石の居本 曰日越 高佐山者 是月本 後府 跡不在 十二日 固石 室號 云云 居

也 且是 果居 穴居 の附 石 窟 也 今云 石 窟 也 今云 石 窟 也 今云 石 窟 也

高天原 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

按る 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて 宣旨ありて

所名 所名 所名

所名



其二

其河云格うつてけく
 麻指又人むろの廟とて九二天
 の人いこむ白格二格人まこと
 推世を右の老人の坊る推殿を
 そきて其世と人二載と

又長官の里亭まで
 踏りつゝ
 其河云格うつてけく
 麻指又人むろの廟とて九二天
 の人いこむ白格二格人まこと
 推世を右の老人の坊る推殿を
 そきて其世と人二載と

所名

高社社講客社客社 東市名方命 客社の名社よりして不承なり此二社
西と並に坂をやりて園中へ之坂の下はなり宮崎にもあり此坂をこせ坂若戸
坂もつたた度分某をいらく九百七十八年斗末なり

豊宮崎宮崎 東市名方命 又此坂下河内にも神小阿九
宮崎の大海岸にもそりて引造て其間の田畑は細流おまて経緯に入り

そのく名付しそりて坂が岳東に神道山西に熊野霊山とて又詩客弄
宮崎文庫宮崎 東市名方命 慶安元年に管建ありその外宮祠官多の学授み

講習討論の寮也東市名方命 西八間南三間あり南面より九ノ淵浪の右る金山を
遊遊勤死に七十年をいらく此庫裏なり

揚子殺千部に及り揚子 東市名方命 慶安のとき林道春春秋傳揚子 東市名方命 抄を
學校と来てそりて其の書籍をいらく此庫裏なり

又此坂下河内にも神小阿九
又此坂下河内にも神小阿九
又此坂下河内にも神小阿九

文庫書記之文あり長文ありこれをいらく此庫裏なり

録亭等の記もあり又外の額に三宅若菜道慶の号之内の額に弘文院
林氏等あり其の豊宮崎文庫の五字也床の間にも大社宮尊号後

陽成院の御宸翰をいらく此庫裏なり

屋上屋上 東市名方命 此庫裏の屋上は昔の書物に記あり

廣會大國王比賣神社廣會 東市名方命 尾崎にもあり

外宮横社十六座の内外宮 東市名方命 大國の混かりん

修加利社修加利 東市名方命 儀式帳み式外名所の内とあり

井谷池井谷池 東市名方命 堀が森の西より井谷とあり

梶本梶本 東市名方命 林後平源ふ河田口の社なり

所名

豊宮崎豊宮崎 東市名方命 打田の地名なり

神樂

他の神在のきく神をきく神樂と云ふ
ふる一内師の宅へ神をと構へ神樂
扱へをりりて勤むは神樂の神
體ておまふあは其天面宮へ修め
旧元足るやうに修めたる修送り
修りたるものも其天の神
へ神をきくも其天の神
のいへ修送りのやうに内侍の
神樂と構へしものなり
今也 吾國春平の化へ神一飢
石をの神樂と神一もお楽音
を振りし神をわい 區洞の神
よりいさしんとのまをるなり
又神樂の父母の赤子を修め
おく 愛恩神樂を修めし
ゆを修めしものなり



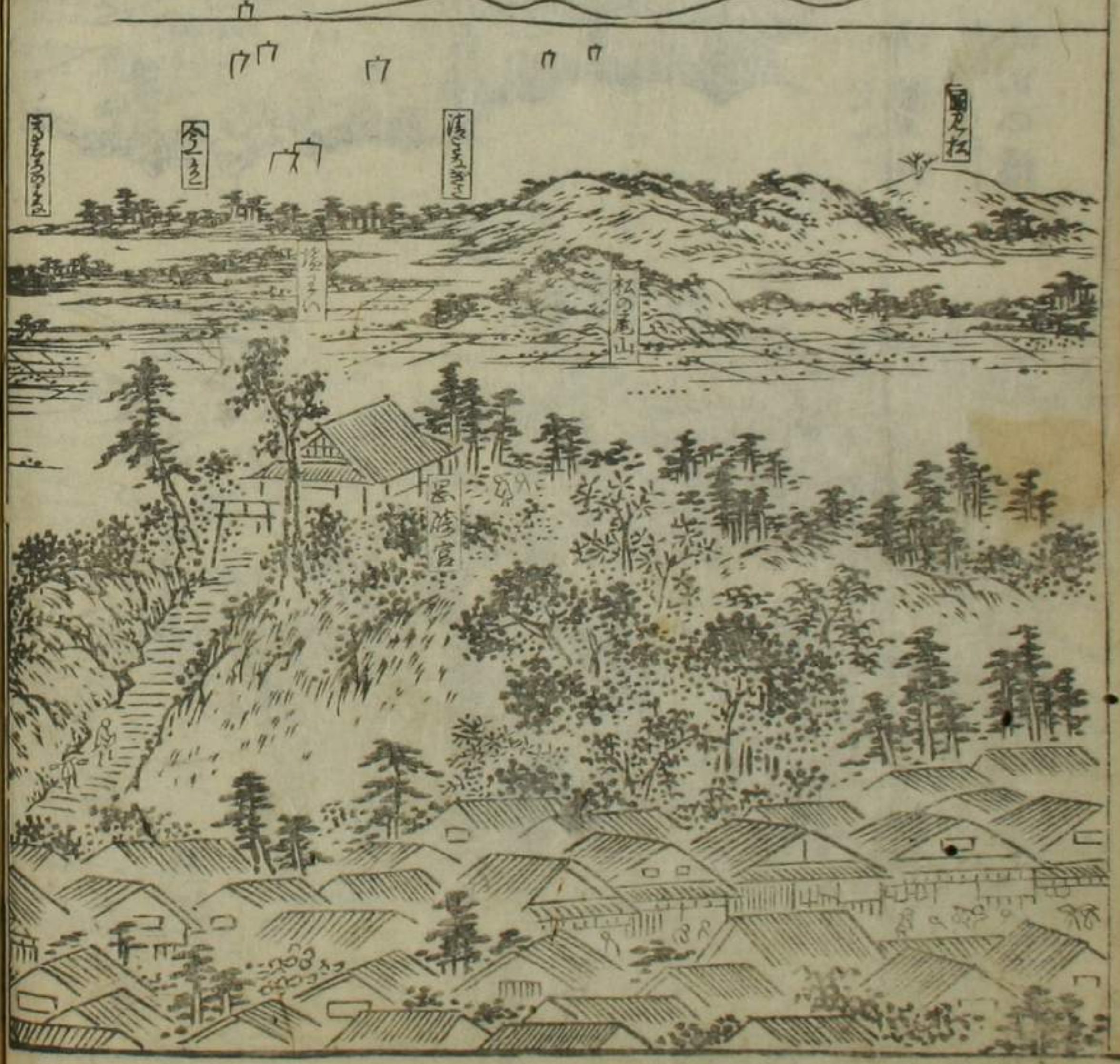
神樂中の内侍
里神樂のついでに
神樂のついでに
今とんを修め
神樂



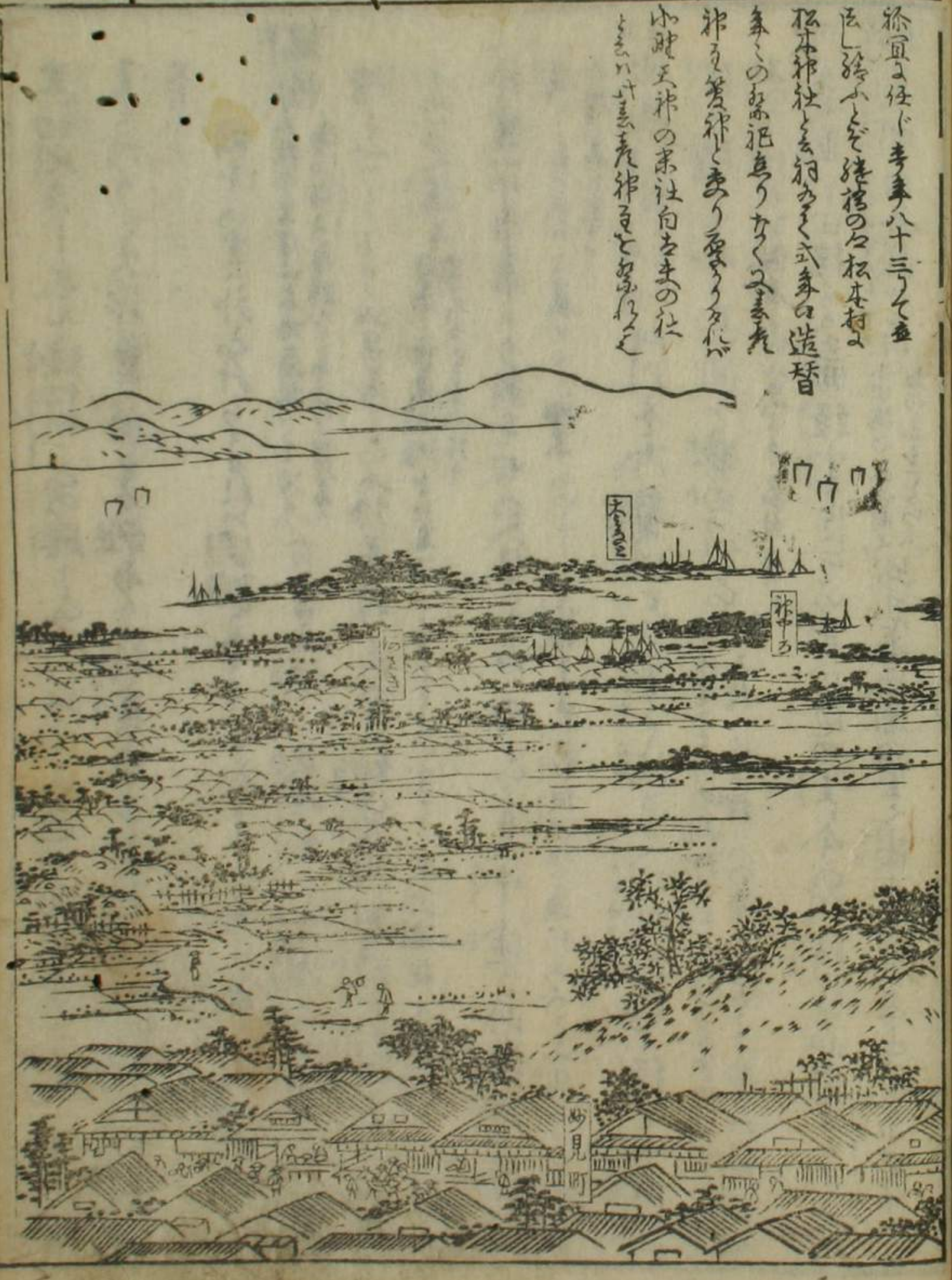
妙見山

附 白土夫の事

非宮古記曰貞觀二年
大内人高主度命氏の
繁榮を此園傍の社は
新られ二月十日十
又日月胎二人の男と
多度心宗雄を雄と号
く同三年十一月十八日
二月二人を 鹿春海秋
並く号く内日年十月
十五日より二人の男と号
を辨まき先之けつひふか
申しも云々津その香深正真の
津を授けし系統連綿と
其家今尚非宮に教まなり
往昔延嘉十八年二月廿日貞



徐直は任ト孝年八十三にて在
法し給ふと経徳の松本村
松本神社と云羽さく式多の造替
多くの松祀ありかく又ま
津を授けし系統連綿と
水時天津の末は白土夫の社
と云いし云々津と云々



其切開き一木を堀切町との腰との此地に造る櫛を園本櫛とす
とて惟りて大御宮(秋)なる例あり故実ありゆとぞ
大木の根よりなり

成忠

園本の里の外に井らるるは別よりなり
継橋 旧名今不詳一名地蔵橋とす
右書み佐々良姫命と大園王命弓を繼いで

橋とせしより此等ありと云地蔵橋と云る勅使の時叙爵家臣兼此橋
まで又送る 延喜と地蔵橋とを流るるにせよといふのこゝを河橋橋とす市井水辺の

外宮一のを居より園本町の入口を中乃と云其中途に此橋橋あり西の

小田橋 是れと妙見河 此川を河野川と云と流して河野川と経ては城濱
清き渚あり其間を勢田川と云 此橋の在りの欄干のありをありと云

河邊里 小田橋より三所程小をじては河邊の里今今の川流いて此不又あり
妙見河 旧名阪が岳 小田橋の東の町に妙見河橋の里に尚下の尾上との系なるに

所名

園本宮 妙見河のたもとあり 妙見菩薩北辰尊皇の像安坐せり長三尺は長
秀松ありて面容童女のおく在りの二指ををみ指さし右に御持せり

素木川よりと其古井ありと云はれ給ふを云し 信と云ふは似たり
昔は園本の宮と云はれ地は社地は辰尊皇の胞衣を代り納めしと云はれ社地は胞衣と稱す
ゆは不浄の中よりなりと云代の故多し今もまの人の不浄をひく社地なりわらわらと云

一はは首外宮より内宮(河内)河邊の河尾上川にて多き瀬あり其瀬を求むれと云はれ
引ては妙見の像流渡り即是の裏に妙見皇と稱す其河より雲は橋して小兒の殿と

尾部社 街よりありあり 泉神未詳と云ふは倭姫の命又必す 非本原より
泉神の西より

即命石隠との地中へ小御孫まゝ尾部の社へ上尾上との系なりと云
秋谷子かかれの園のあり 稚子 けりけりもあそそ年の経妙なり 仲正

隠山 けりけり所の末妙見河と尾上坂との間の水のふなりと云はれ古記は貞観年中妙見皇の像
を尾上陵より西小田園橋の宮に居ると云はれ妙見皇より云はれ

世記云雄略天皇廿三年の春二月倭姫命自尾上との宮に退きて石隠まを
あ尾上との宮に居ると云はれ 一はは首外宮より内宮(河内)河邊の河尾上川にて多き瀬あり其瀬を求むれと云はれ

我せこつらゆらんおの影さけは今日よりと云はれ 一はは首外宮より内宮(河内)河邊の河尾上川にて多き瀬あり其瀬を求むれと云はれ

尾上

尾上 山古名隈園と云い倭姫命薨去の地なるに之を築集及び代々の撰集と詠歌多し寛文中中尾上社として倭姫命社再建あり

一が又破却今の誰建と云ふもたゞ社存せり墓所ありしや寛文の版

者ありはげし引物ノ罵辱しめて退散し或は後世に於て今も其地獄谷

常明寺 高日山法持 〇石のあり 尚不身三の天寺之幸なる染師して天台宗額後

陽成院御宸翰奉在希山門木樓より聖徳太子の建立ともいふ

〇按るに山尾尾郡尾上寺と云ふ尾上寺と云ふ寺あり又天福寺と云ふ

〇社置置落社 常明寺 〇阿闍梨の庫裏の東竹林の内にお

と云ふ系祀の正月八日 女度之外宮の系社なる由女度會社を神樂男た勤之

神官馬にのりて素向あり其式とまぐりて是也 又男女陰形の解を祈

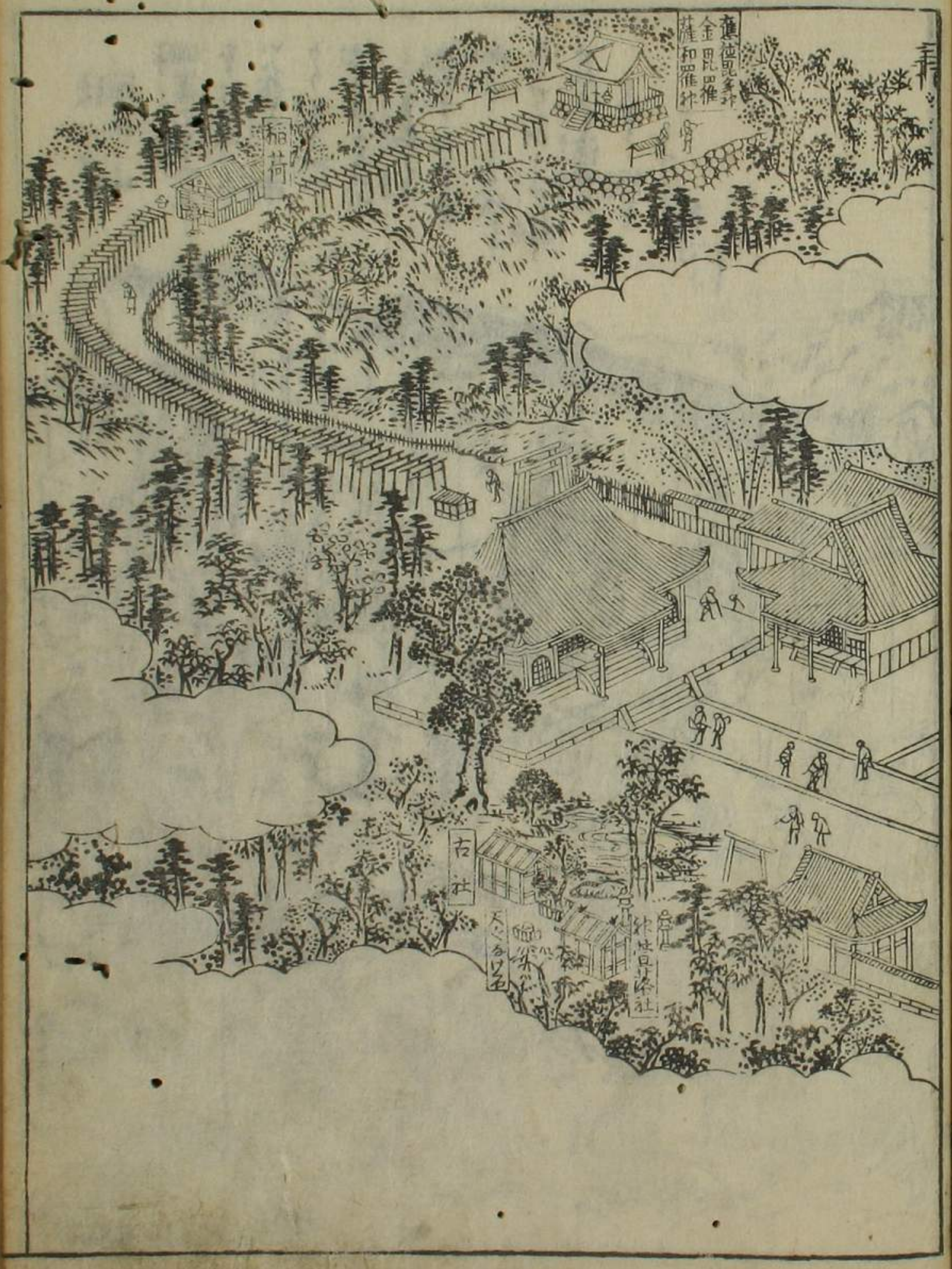
たり共信よりなき者之を拾ひ男と女子を深きのとて一と成りて終り

〇又鼓吹あり 〇岩窟 〇阿闍梨の庫裏の東竹林の内にお

〇眠地藏 〇石歌目 〇結城上野入る道忠墓

〇金鼓山光明寺 〇聖武天皇建三つ 〇阿闍梨の庫裏の東竹林の内にお

〇結城上野入る道忠墓 〇阿闍梨の庫裏の東竹林の内にお



常明寺

本堂天井又右回系好の
樂書あり

出生死沙入涅槃
專念旨趣大樂大
財常能堅固

古田真禪山下
野僧一七日参籠

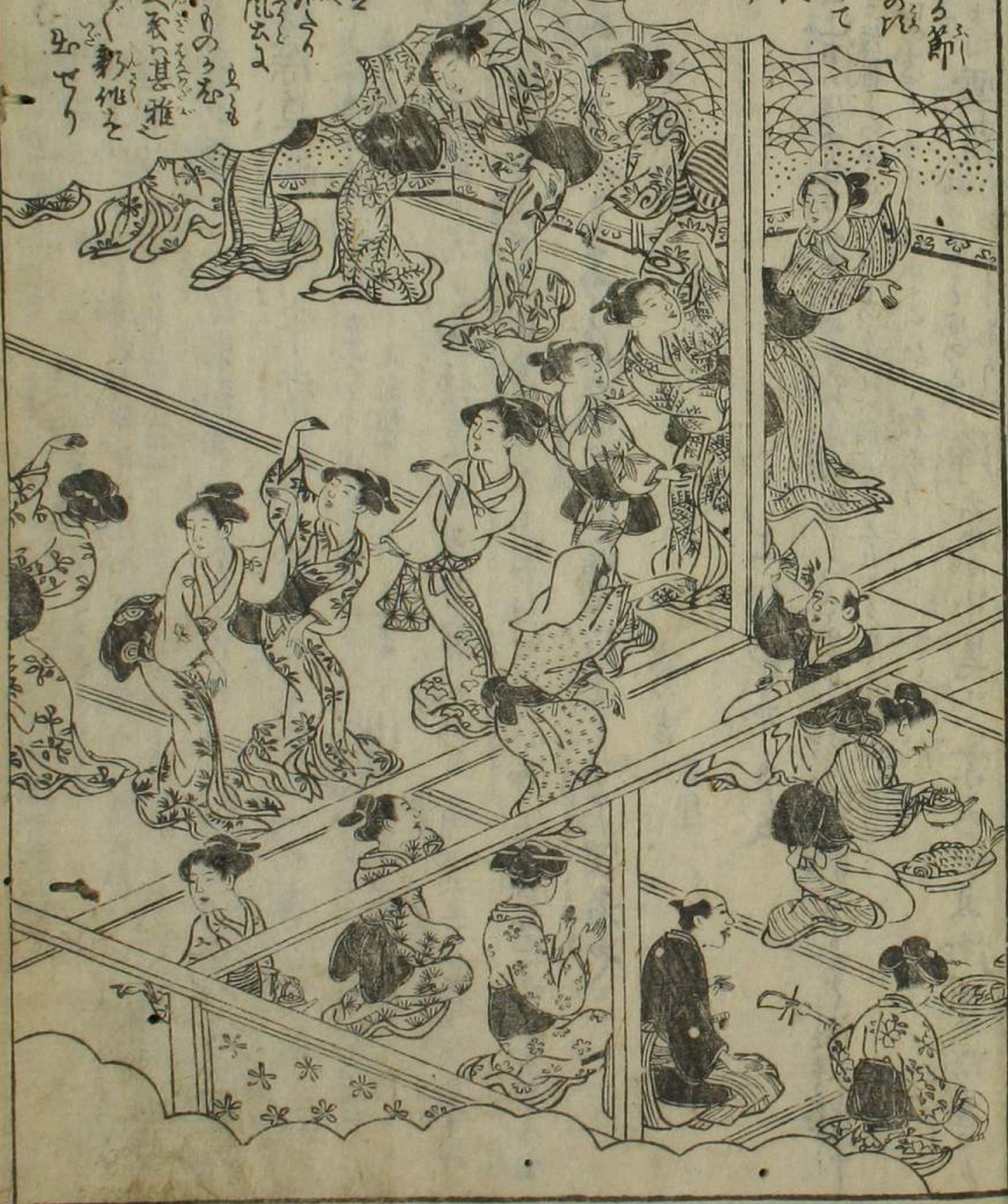


古市

市の市場之今法園
三日市に日市八日市
さといひて其日ときま
やく市をさせり名
ゆりうす市に近圃
を郷の商人の集り
不かくんは其市と
さん不む花女ありて
様人の愛と製ま
是は漢船をさ
二月ト
板此右市も同の
ふの内ふく茶糸
よひいおとく
同のふ氏節と
さといひもの
ちうけり



物あつたる節
かる流いの比
うりうりて
川修多
流り毎
是と修勢
着取と採
一都鄙
とさ
華菴の
うひ物とい
あつた
此地の酒を
香通はれ
三津都風云
服あつたりのうを
いふ(衣)其推
今もましく新地と
出でり



〇後白河院碑 此一代の僧侶所懸樹の
くまの田に上りて年々

北島頭家御碑 此御と津國妻郡中ノ我死と今ノ境あり結城をう
〇結城上野

入道自筆の軍中日記勅制軍法と云書あり 明寺藏筆無と云
〇鐘 後深草帝の御宇常盤女實氏入る寄附之毎日酉刻子刻
撞之 天心中御宮神宮方より津路の古法をいけ撞い
〇如中ころんさあはん 〇て借後を程をく平字者也

書中遂被刃女ら田種をへ後吉非宮極めく自首をく申す
〇如中ころんさあはん 〇て借後を程をく平字者也

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

東照山清雲院 妙見所と同のの 浄土宗下馬下家世に御其撰寺と

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

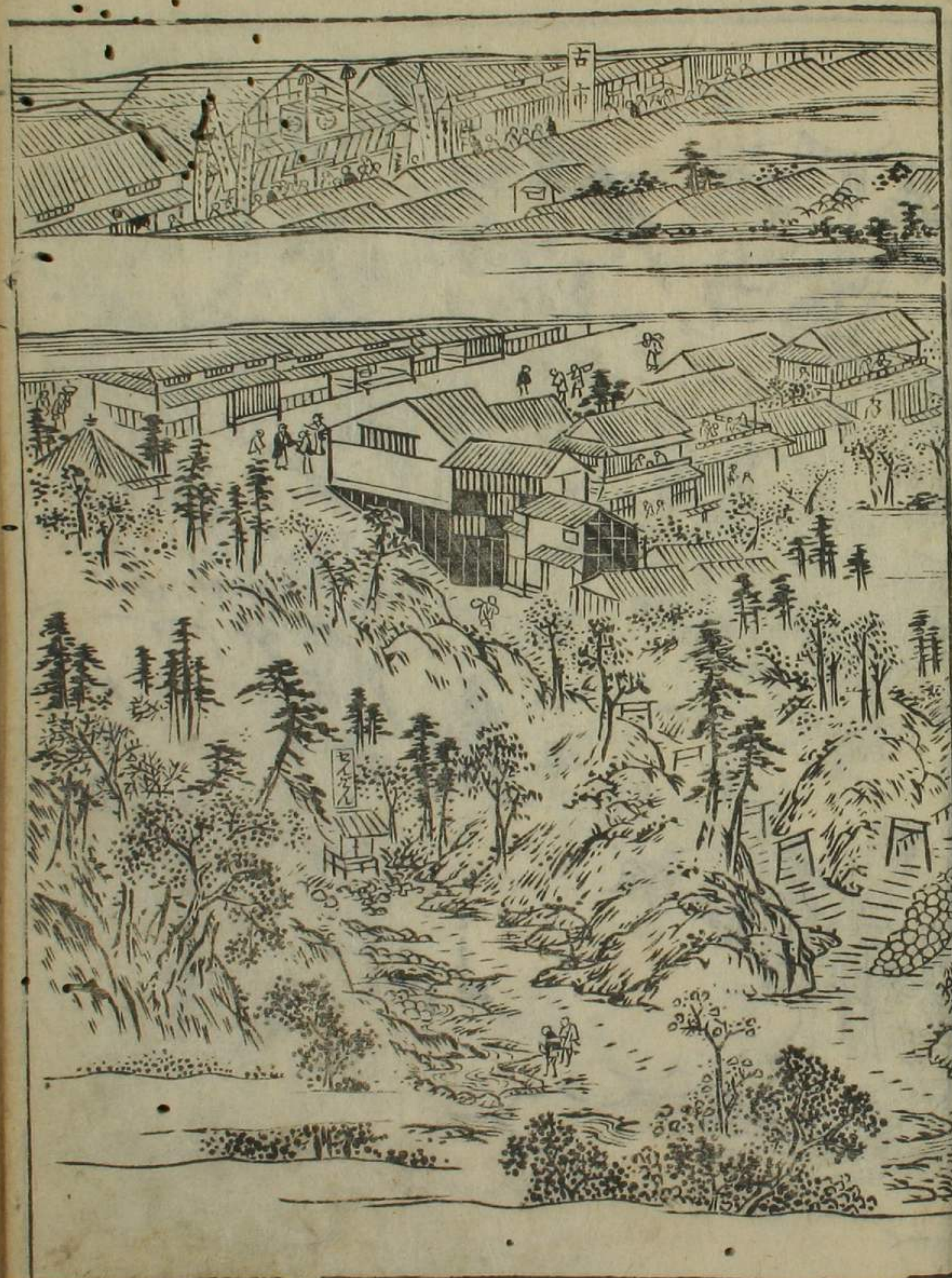
〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり

〇此茶田の遠りみち七口水と云い程あり



石

出づるの津も

ありてや

葛蔭石

変林

山岩

拜

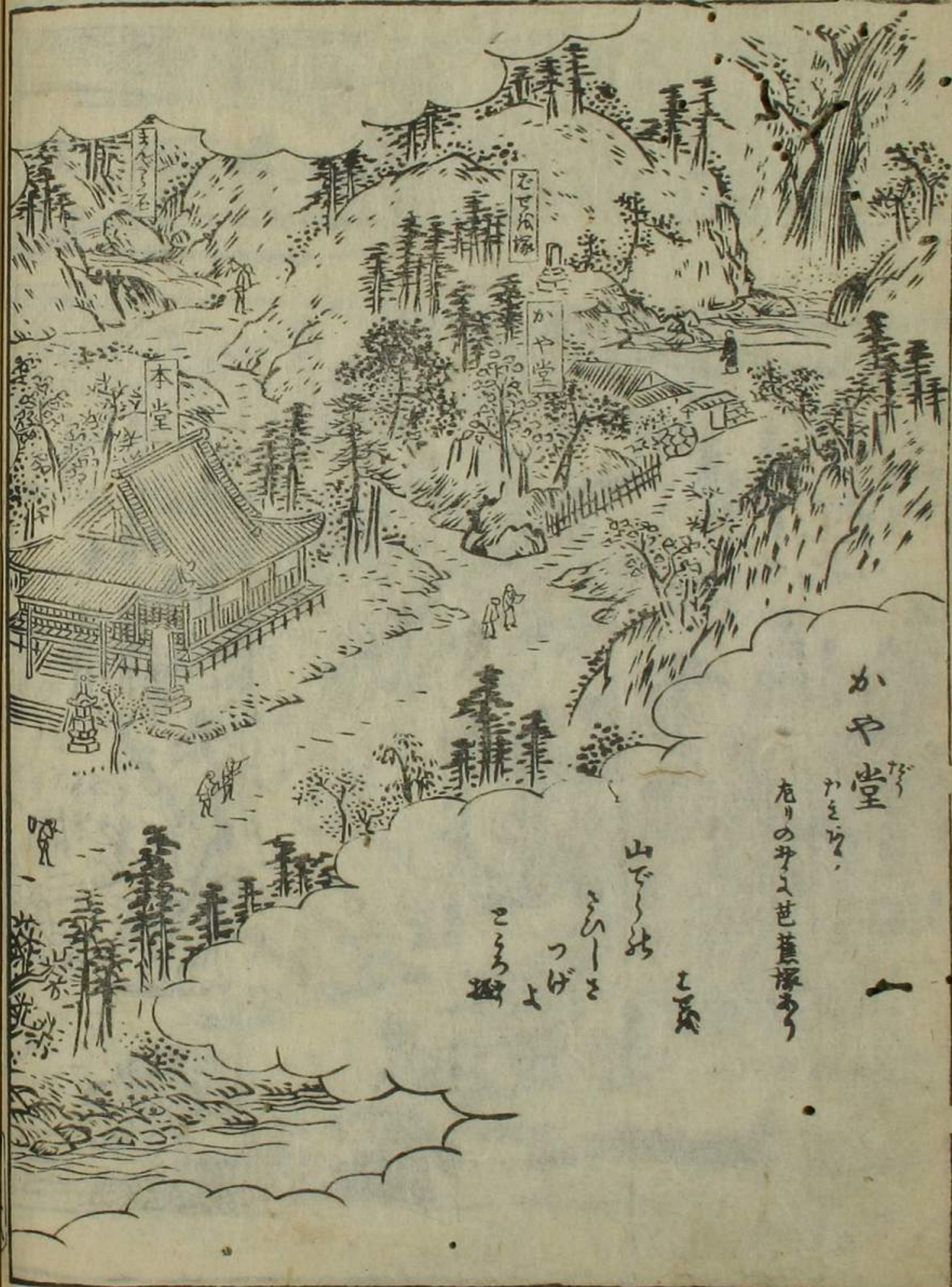
石

石

石

石

石



かや堂

在りの寺に芭蕉庵あり

山でくは
つげ
こころ

菩提山

坂上集別本 伴善中 菩提山上上月 刻して
述懐せし
月ふらね ねくむつひをいそぐ
西の



坂上集別本 伴善中 菩提山上上月 刻して
述懐せし
月ふらね ねくむつひをいそぐ
西の

所名

中地藏 古名の次 け間長等との内宮の外宮を八十町の其(中)同(元)町見
右中(の)地蔵との小堂を長令水と云ふ
葛巻石 中(地)蔵(の)石(の)長(令)水(と)云(ふ)は
に似たり今の河連を引て小社と此傍に觀音あり是を大石の觀
音といふ云々極多く嘆く騷客遊宴の地とす

王孫池 古市より智恵の谷にせよ坂をくだりけりあり信よおんか池(の)水(は)地(に)云
一箇の川より北捕部川の中右よりうけ川筋なり

月讀伴持諾両宮旧地 布能戸坂をりかおるまの
宮も流して右今の中村の地も後せり近宮の年月もろくも延喜
式も載るなり今の地と
一面の川より北捕部川の中右よりうけ川筋なり

菩提山 古言(の)中(村)の(中)右(より)う(け)川(筋)なり
仍基(の)文(治)元(年)良(仁)上(人)と(れ)を(中)真(と)す
西(の)外(集)又(善)提(上)人(と)す
方(り)兼(元)三(年)正(月)十(九)日(に)嚴(力)十(七)日

仁壽二年八月廿二日洪水二
宮も流して右今の中村の地も後せり近宮の年月もろくも延喜
式も載るなり今の地と
一面の川より北捕部川の中右よりうけ川筋なり

本名(の)六(阿)弥(陀)佛 仍(基) ○西(服)立 不動(毘)沙(門) ○徳(守) 雨(室)堂(の)弁(必) ○二(王)

門(の)大(伽)藍(の)地(と)し 金(堂)大(師)堂(多)宝(塔)經(卷)と(り)弘(長) 年(中)大(火)燒(失)と(其)後(宝)曆(十)年 朝(德)岳(尊)隆(阿)闍(利)と(り)再 建(して)子(隆)範(及)附(属)と(す) 大(二)佛(像) 續(日本)紀(元)七(年)孫(德)天(皇)天(平)祥(隆) 存(勢)大(神)寺(り)造(ら)と(り)の(初)め(寺)也 舍利 聖(武)王(皇)舎(利)を(け)寺(と)し(納)と(す) ○萱(堂)

阿弥陀院 良(仁)上(人)退(隱)の(地)と(り)文(祿)元(年)多(る)神(地)を(傳)へ(り)と(り)流(と)中(真)と(す) ○弘(板) 名(号) 元(享)三(年)三(月)十(八)日(空)海(空)と(り) 曼(陀)羅(石) 大(正)二(年)空(海)刻(之)と(り) 曼(陀)羅(石) 古(瓦) 四(寸)四(方) 堅(の)上(下)ハ(缺)破(也) 諸(佛)依(般)若(波)羅(密)多(故) 是大(神)祀(是)大(明)祀(是)無 般(若)波(羅)密(多)咒(即)說(咒) 諸(波)羅(僧)鵝(諦)菩(提) 訶(般)若(心)經(一)卷 四(書)寫(之)御(所)近(邊) 承(安)四(年) 月(六)日 代(高)倉(院)の(御) 宇(を)御(所)と(す) 書(一)卷(の)弘(長) 宮(の)中(に)



幅三尺長五尺計

皇女本林 八十餘川の中村にあり或捕部村 西の方より表をもちる 日本紀雄略帝第二皇女携幡皇女

月讀宮
紐持諸宮

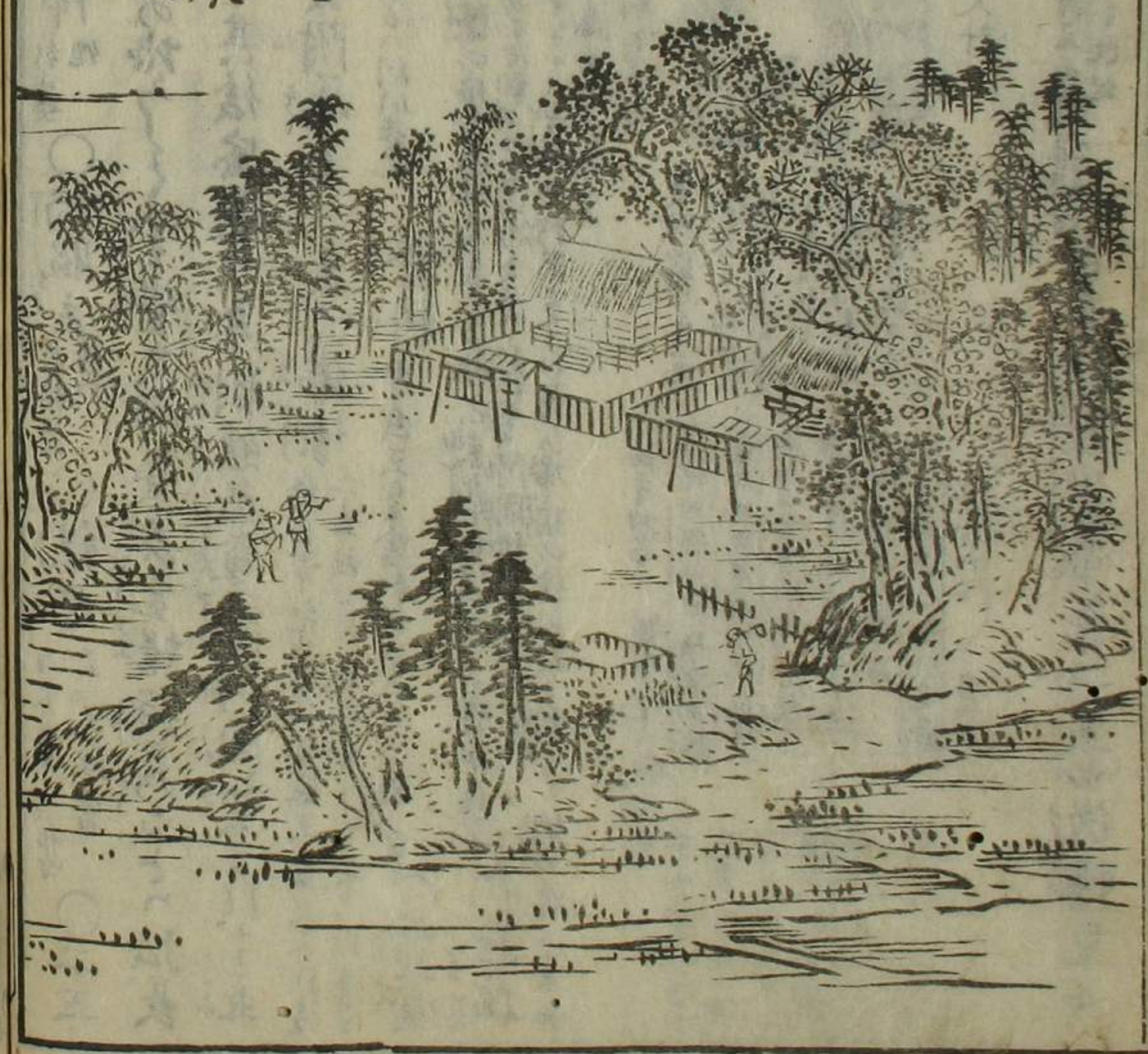
私安百首
實清朝臣

いとさふ
乃
淺紅

月
月
月

全
九条内大臣

あまほくふ月日
とてとぞうた
よはあ
あ



興玉の社
春
日
此
其

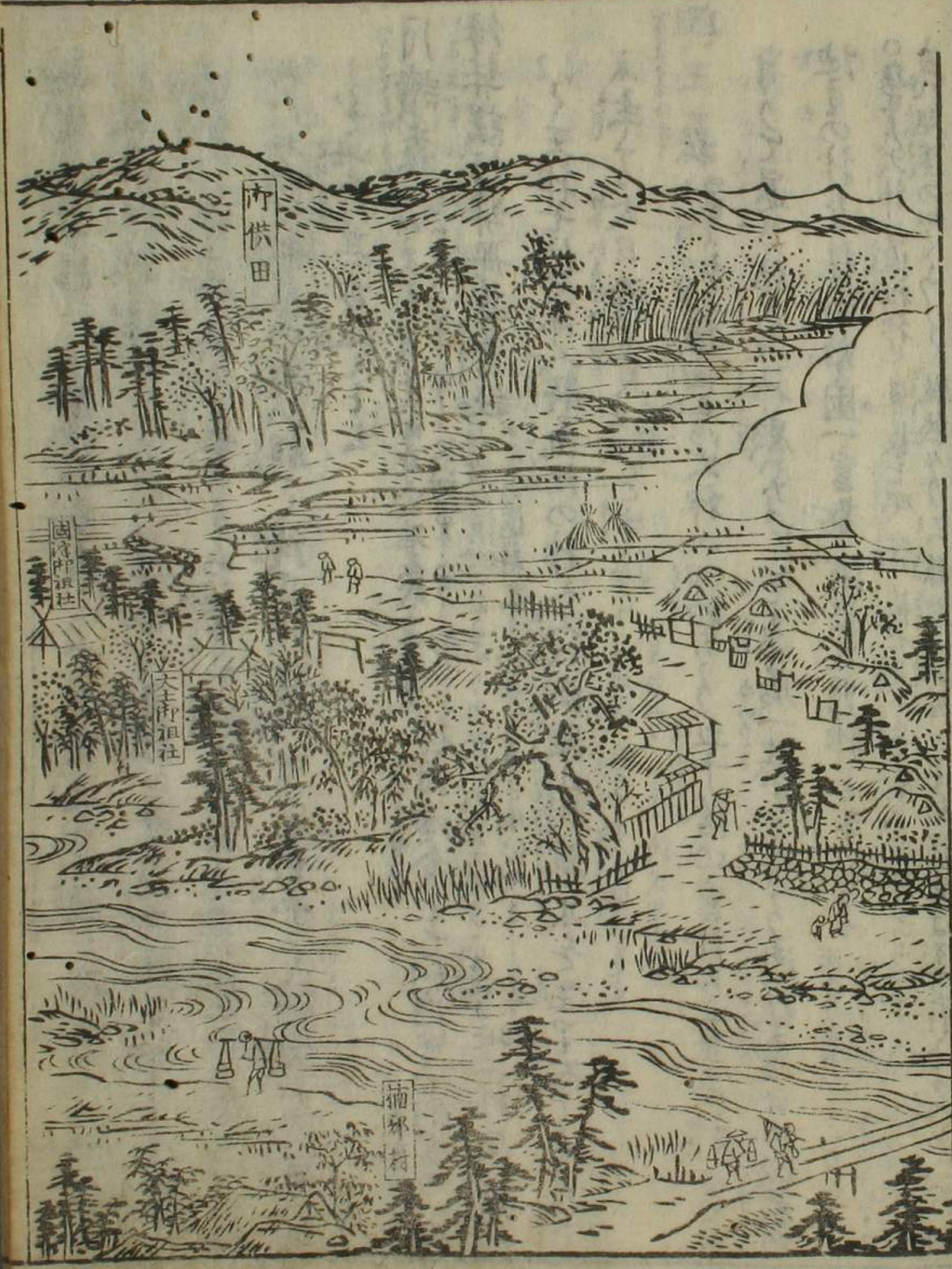


楠部村

古土御祖社
 國津御祖社

御常世田

又凡吉日をまつりて大御田の浦より長官の
 御司のたま政所のたまこれあはるる出納
 肉ひと山内人苗を授けりてよりお前と極
 皆長官のたにゆくと三又斗なる御田を
 左右十人斗を所まふ泡りたりたをたて
 又管つゝお概してゆいそを其方おそ
 又酒をたまこれに御儀川をたて
 後よ水とゆい合
 繪よ麻糸
 やぶれ



所名

故宮より五世孫の... 廬城郡武長と云ふ人と密通して... 阿用... 臣國... 後醍醐天皇... 此の如くして... 此の如くして... 此の如くして...

月讀森 中村より平宮千八町斗水之延成式を拜宮... 社月讀森... 此二神... 此二神...

倭井諸倭井冊尊宮社 月讀の宮地の西より内宮の別宮の西より... 此二神... 此二神...

天孫七代の末人... 天孫... 天孫... 天孫...

大日靈貴 天照... 天照... 天照... 天照...

後回立... 後回立... 後回立... 後回立...

興王本... 興王本... 興王本... 興王本...

地皇の神... 地皇の神... 地皇の神... 地皇の神...

天孫... 天孫... 天孫... 天孫...

椿淵... 椿淵... 椿淵... 椿淵...

楠部村... 楠部村... 楠部村... 楠部村...

姫命... 姫命... 姫命... 姫命...

宇治比賣命... 宇治比賣命... 宇治比賣命... 宇治比賣命...

田村比賣命... 田村比賣命... 田村比賣命... 田村比賣命...

二座之両社... 二座之両社... 二座之両社... 二座之両社...

浦田... 浦田... 浦田... 浦田...

中... 中... 中... 中...

倭勢上人... 倭勢上人... 倭勢上人... 倭勢上人...

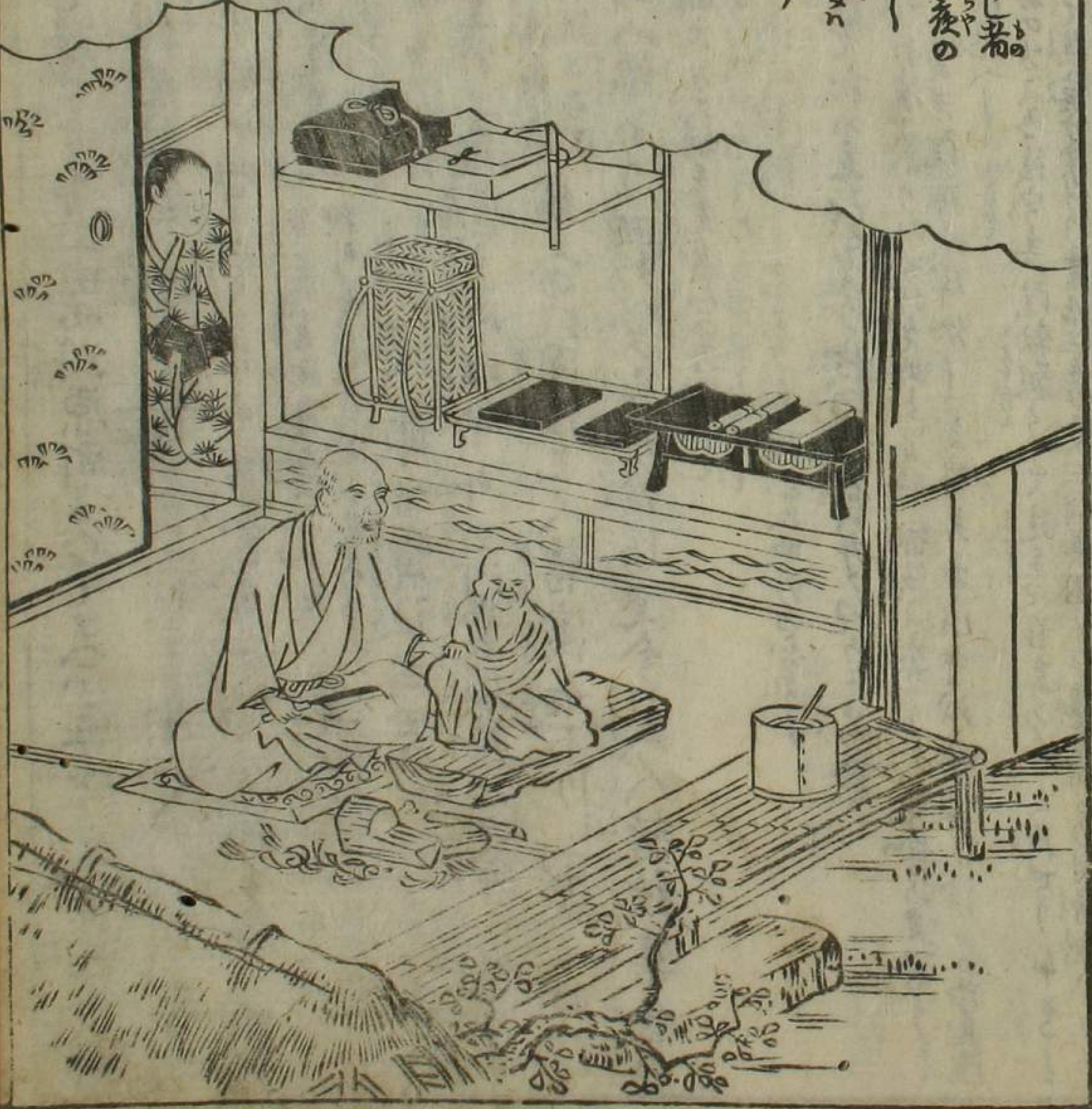
西行谷
神照寺

西行物語云西行
一名因位後も相
院の御付小面石
をたけし九条村
富住といひて富
月村の人と云ふ所
をたけして西行の
御付の御付宮
清で御付宮
押二見の浦の浦をこむる御付
波のくまは神照の浦にたけし御付の
も勝つたれは御付の三年身より
在北方にたけし御付の御付の御付
の辺に建久九年三月十八日御付の御付
をたけし御付の御付の御付



俗傳云西行の妻あり者
思て此書よきなりし一夜の
うらに我像を造りて
香花として殿を法を妻の
室に娶とせしめて終り
任果て今も花僧と傳へ
神照寺といふ像の池に
といひて後入元の像と
副て女と

かゝる像のつたふたふも西行
物語に日たの妻のむと
とらふも神天建元
とらふて往生をといひ
うら眼もい法元身
日たの像のつたふ
那も法



稱し古寺号を稱せどえり山田西川原町ありて天正年中宣長後と他
の寺院と違ひ佛堂種社の類なく禪教なりけり寺名何れとも
あると云ふ徳泰を經て紫衣を著して官家の息女代々任職し終六田山
の大功名譽又不違思定 庫裏表裏殿廣くしてと展
神時永徳二十日若の果あり 長文天社 寺の南

園田 中乃きんの元の方と稱あり新橋と云 ○那自賣社園田の元の方ありて
標のなるこの所を川原町と云ふ

西谷谷神照寺 宇治の西谷の 建之の以園位二人暫寓居ありし事又西谷
自他陀造りとも傳あり西谷谷の扁額廣くはるる今又文人詩歌集會の
席と云 今の宿願馬九六袖光廣くの所寄附と
と云り今より比丘尼僧坊と尚画と云はる

○餓鬼谷眞淨院 南隣あり此神代文姓と云僧密法と云一寺異の邊あり
流と云密法を此寺に傳へしと云

法樂舎 園田の村の右の方あり後宇治院勅札ありて建之に百等の今又存せり本寺と
三々佛ありて其言をより建治三年三月異國より龍峯集の付添御のより

不動堂 日石の 明王院と云其言字よりて本寺不動明王 庫裡客殿八五五十
蒲生飛彈守氏卿と命し遣らし上郡城中も善法を修せりい不動堂ありと云

津長社 細村の西の傍あり本祭三座 津長社の南に本祭一座大山抵市社令則
細長田賣令ともいふ大山上 ○大水社 山の傍に右内宮橋社廿四座内

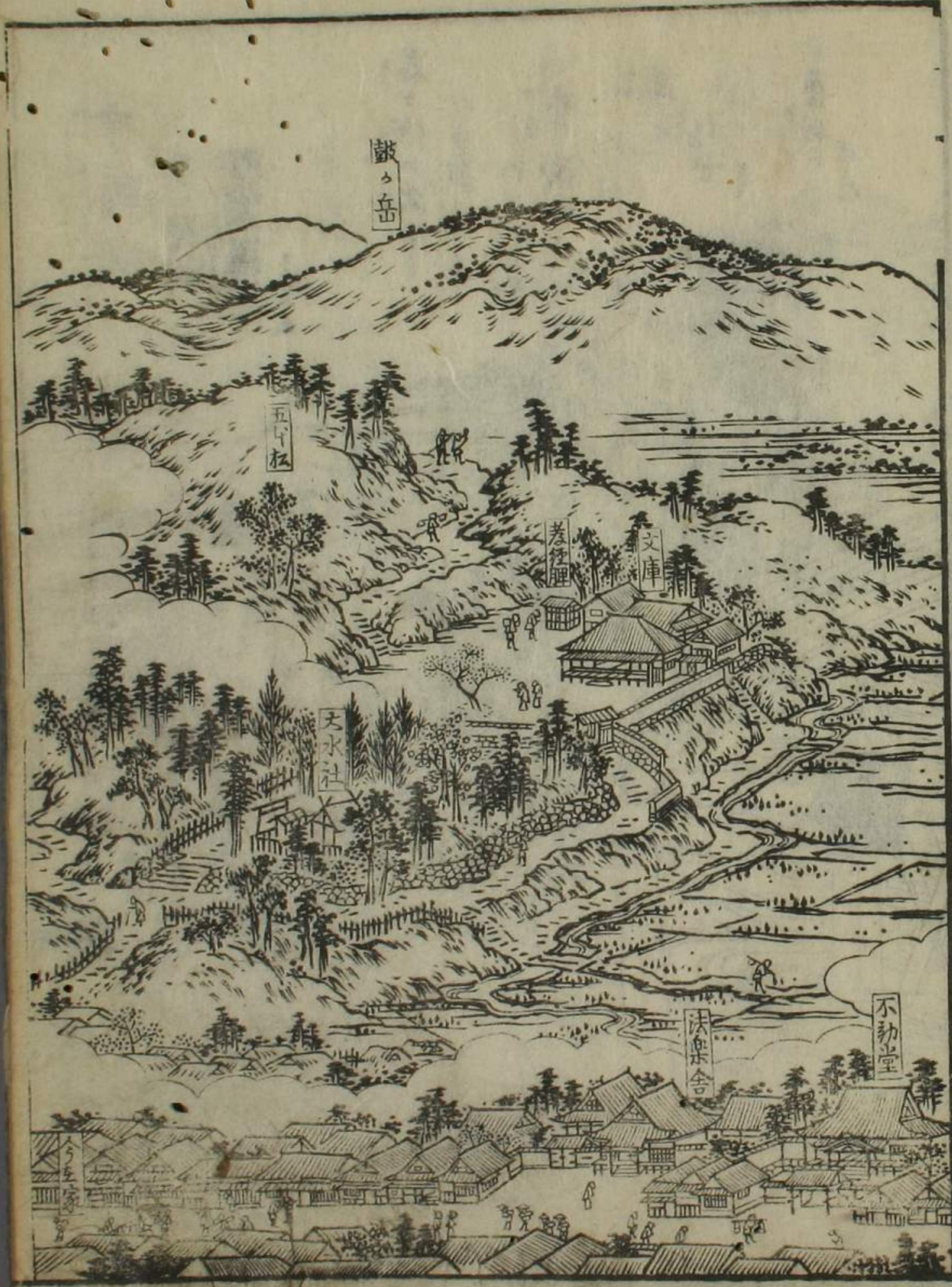
鼓岳 大橋の西より宮川又十餘川二川の川に橋とて 長明
の堂あり後てつとむたけと傳傳と云

けり世に我守の古塔ありて又十餘川の西より磐石ありて磐石の官修の南に
宇治山田紀列の境あり三坪塚と云る古の官川の渡場廿余町川上佐八村

ありてまうる茶と云る内宮(恒素世)と云ふは鼓岳と云るも其以外宮
のまある也初まの向の神ありしが初世より氏家押成せりと寛永十六年向の

おろく神ありしとの公命とていつと後せり

神鼓山長明寺 鼓岳と云 本寺心觀菩薩長明智く此不又恒と
林修文庫 鼓岳の東の尾傍 真言に年々造立ありて公より乾會と云ひ志ある
寺持合しで造立せらる初め林修の南の方丸と云る不(と云る) 此不(と云る)



林山奇文庫

書籍法家の寄附
 着子を納む傍に石碑
 あり老練一郊を構む
 東武源縣の書石の
 墓石にて奥及の石を
 を奉じてを建てる

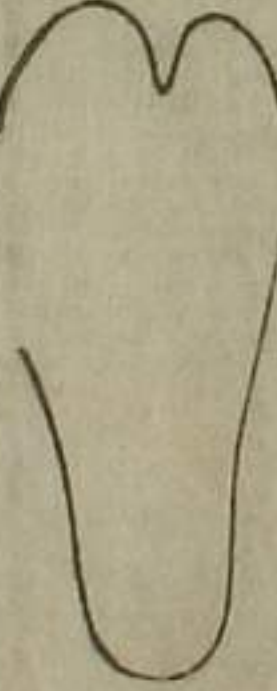
巖ヶ岳院
 不動堂
 法楽舎
 大津社
 津長社

所名

橋姫社 橋を守護する社也。古記曰橋姫の社を八所
 治橋や治々よあれはく野々川八十鈴川也。善通の橋より野々の
 三、常磐神を曰つて。常磐神を曰つて。常磐神を曰つて。常磐神を曰つて。
 一此橋は是より十余町下流の中村曾波河原ありて板橋の敷ありしと
 永享二年普賢院の軍義教公御奉宮の時今の如く大橋を架けし
 其曾波河原の東に今の中村真五郎の南に其橋は二株ありしと治橋は
 社の南にありしと云ふ俗の言に依りて其川を治と云ふは治橋の
 其年治橋の人の形ありしと云ふ按るは是橋の人の像なり是亦式
 五十鈴川 中村治川と云ふ此川二流ありて一流は志呂磯部村の辺の谷に
 一流は治川の谷にありて又志呂より流るる末に中村橋部麻海村に二見
 の海ありしと云ふ今南より流るるを志呂と云ふ北より流るるを
 鏡石 水より一、高式大横立大斗の大石あり谷川の方より西面を
 清淨明白誠之磨ける鏡の如くありしと云ふ鏡石社石登宇社並
 て二社ありしと云ふ此社の用之今未だ鏡石の鏡石ありしと云ふ
 なるや、と云ふ老人の傳りきのみもと云ふ川の川より大石巖を以て
 中村の鏡石之能く其蓋岩ありしと云ふ奇之太石の上より石面自然に其蓋の
 又十鈴川の川より其石と云ふ物ありしと云ふ此石治の谷にありしと云ふ
 歎くは荒本田氏の祠也惟然も其家も畏す



二寸計大小さまざま
 心形もまたさまざま
 奇形八分あり



四寸計

伊勢參宮名所圖會卷二

